送り盆

神村律子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
送り盆

【Ｎコード】
Ｎ７１４６Ｈ

【作者名】
神村律子

【あらすじ】
送り盆。休みの終わり。皆それぞれがそれぞれの場所に帰る日。

今日は送り盆。

全国的なお盆休みも今日で終わり。

のところが多いはず。

私の周りの人々も、皆今日で帰る。

私も今日で戻る。

帰りは橋のところで大渋滞なのだろうな。

でも帰るには、あの橋しかないから、避けようがないし。

「私はまだしばらく帰らないんです。彼岸過ぎに帰ろうかと思います」

と隣の糸川さんが言った。

「いいですねえ、羨ましいですよ。妻が五月蝿いので一緒に帰るしかありません」

「ハハハ、私はむしろ妻に疎まれてますから、先に帰らせます」

「ほォ」

糸川さんは苦笑いをして、

「実は娘が心配なんです。どうも夫婦仲がうまくいってないみたいで」

「なるほど。旦那さんが冷たいのですか？」

「いえ。遺産相続で、向こうの親族と揉めているんですよ。で、間に立たされた娘が辛い思いをしているみたいなんです」

私は立ち入った事を聞いてしまったと思い、話を切り上げた。

「それでは失礼します」

「はい」

私はこちらを遠くから睨んでいる妻のところに行った。

「話し込むと長いのは相変わらずなんだから」

「仕方ないだろ、しばらく帰らない人なんだから。それに遺産相続で揉めてるみたいだよ」

「まァ」

妻はビックリして糸川さんの方をチラッと見た。

「そんなにお金持ちだったの、糸川さんて？」

「ああ、そうみたいだな」

私は歩き出しながら、

「死んだら楽になるかと思ったが、気苦労は絶えないな」

「そうね」

私達は送り火の中、天国への道を登った。

「早くしないと、また三途の川の橋が渋滞するわよ、貴方」

「ああ、そうだな」

私はもう一度我が家を見た。

「今度は彼岸に会おうな」

庭ではしゃぐ孫達を見て、そう呟いた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7146h/

送り盆

2011年1月27日09時42分発行